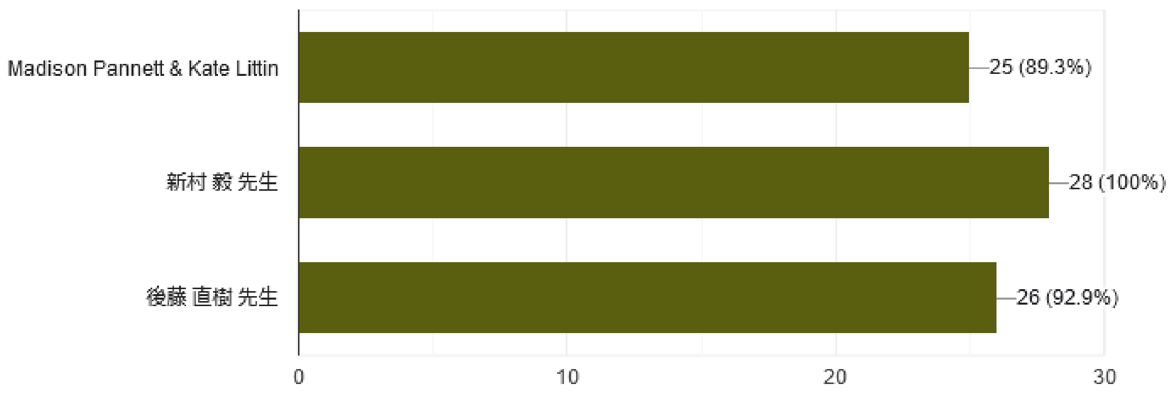
岡山理科大学 獣医学部 国際獣医教育研究センター主催
第５回 国際シンポジウム　アンケート集計結果

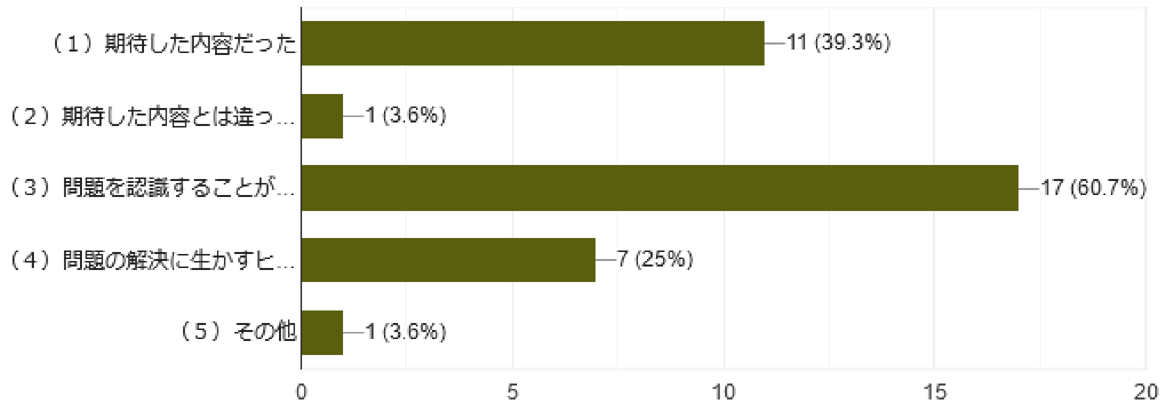
質問１．視聴された講演動画の演者名をお答えください。（複数回答可）

28 件の回答



質問２．視聴された講演の内容はいかがでしたか。（複数回答可）

28 件の回答



質問３.

質問２の回答内容を具体的にお答えください。※複数回答の場合は回答の前に演者名や番号を記入して下さい。

（20 件の回答）

・AW の基礎知識と現在の状況やトレンドについて、国際的視点で日本の状況が理解できた。
・ケージ飼養、ケージフリー飼養にも課題がある、既にケージフリーが進んでいる欧州でも新たな問題が発生している状況であり、よりよい方法への到達には時間を要すると思われました。その点、動物福祉団体が発信しているケージフリーが全てを解決する絶対的なものであるという内容は偏っており、遅れているが故の日本の消費者に誤認を与える可能性を感じました。
・国内と海外の現状をそれぞれご紹介いただけたため。
・アニマルウェルフェアの観点と現場の現状がわかりやすかった。
・AW のためにこれまでと異なる飼養管理方法を選択することが米欧ではすでに流れとしてできつつあること、日本はこれからであること
・Pannett さんの講演は OIE の HP に記載されている内容だけで、新たな情報は無く、無意味であった。講演依頼の際に、より新規な情報を提供するように依頼すべきと思います。
その点からすると、後藤さんの講演は非常に有効であった。
・欧米ではエンリッチケージですらアニマルウェルフェアの基準を満たさなくなるということを初めて知った。動物福祉を発展させるためには消費者意識（マーケット）も重要である。
・アニマルウェルフェアの概念とその情勢について学べた
・アニマルウエルフェアを突き詰めると新たな問題が発生すること。
・後藤先生：EU での動向からアジアが進むべき方向の一端が伺われた。
・欧米と日本における認識の違いを知ることができた。
・いずれの先生の講演も AW に関する理解を深めることができました
・アニマルウェルフェアと動物愛護を混同してしまっていたため、倫理的な側面から日本の畜産現場の課題が議論されるのかと想像していました。そのため、講義の内容は期待（予想）していたものとは異なっていましたが、アニマルウェルフェアについて正しく理解し問題を整理することができました。
・特に鶏について、各国での現状を知ることが出来た。
・アニマルウェルフェアの海外の状況と今後、日本においても取り組みが必要であること
・先進国とそれ以外、さらには、動物種別の課題を理解できた
・OIE の取り組みや日本および海外の現状/動向・課題などが整理できました。
・5 領域モデルを新たに知りました
・後藤 直樹先生
ケージフリーシステムから生じた課題とそれに対応する対策
・Madison Pannett & Kate Littin 先生
世界におけるアニマルウェルフェアがどのようなものかが分かった。世界でのアニマルウェルフェアの基準を日本の現状と照らし合わせるとまだまだ改善しなければならないことがたくさんあるなと感じた。 新村 毅 先生 日本での実情を具体的に知ることができたので、より日本におけるアニマルウェルフェアについて考えなければならないなと感じた。
また、これからはどのように取り組んでいけば良いのかということまで示して下さったので分かりやすかった。今の消費者の立場から何かできないかなと感じた。
・後藤 直樹 先生
世界と日本の比較を交えつつ、世界の現状を話してくださったので日本の現状がより分かった。欧米の方ではかなりアニマルウェルフェアが進行しているのに対して日本は遅れを取っていることがよく分かった。欧米のレベルに追いつくにはどのように日本が変わっていかなければならないかを考える必要があるなと感じた。

質問４.

講演の内容について質問がありましたら、演者名と質問内容をご記入ください。

(16 件の回答)

Ｑ１．新村先生、後藤先生へ

感想ですが、AW に対する消費者教育や消費者認知がどのように進んでいくのか？

そして認知した上で高い AW 卵が売れるのか？といった点が気になりました。

Ｑ２．新村先生へ

6 ページ目（正常行動発現の自由の科学）において、ニワトリの行動欲求を数値化をご紹介いただきました。後藤先生の発表のオランダの現状の中で、アニマルウェルフェアの指標（Star rating）において、ウィンターガーデンや野外アクセスが高レート獲得に必須とのことでした。ニワトリの行動欲求において野外へのアクセスは欲求のレベルが高いという認識なのでしょうか。

野外アクセスにより鳥インフルエンザのリスクが格段に上がると考えられるため、日本国内では普及が難しいと感じました。

Ｑ３．新村先生、後藤先生へ

将来的に国内での産卵鶏におけるケージ飼育の廃止は極めて難しい課題と思われますが、生産者、行政、消費者（販売団体・市民）が意見を交換し合う機会があることを切に希望します。

先生はどの方面から手を付けることが、重要と考えられますか。

Ｑ４．新村先生へ

アニマルウェルフェアという言葉を最近知り、日常生活において日本の畜産について考えることが増えました。（今まではほぼ皆無）畜産について考えるようになって思うことは、私たちが食べて生きていくということは、命をいただくということ。知れば知るほど自分の生活に直結しているため、こんなに身近な問題であるにも関わらず、知る機会もなく関心もなかった今までの自分が不思議なくらいです。消費者アンケート結果にもあったように、なぜ日本ではアニマルウェルフェアが浸透しないのでしょうか。

Ｑ５．新村先生、後藤先生へ

アニマルウェルフェアを知り、高くても平飼いで安全な餌を食べている鶏の卵を買いたいという思いが強くなりました。家畜を育てている現場の方は、アニマルウェルフェアの考えが日本で進んでいくことについてどうのように考えておられるか教えていただきたいです。

Ｑ６．新村先生、後藤先生へ

興味深く伺いました。ありがとうございます。現状の飼養管理方式が最適解ではなかったということで、家畜管理で習ったことが多数否定される時代が来たと感慨深く拝聴しました。実際に管理していると「...家畜に無理がある」と思える経験はないわけではなかったので、改めて AW 配慮は必要とすなおに思えます。経済性や労力を考えてごめんなさいと家畜に我慢してもらっていたという気持ちはたしかにずっとありました。質問ですが、

①AW に即した家畜管理を行うことに伴い、AW 畜産物の価格上昇がどうしても伴うと思いますが、欧米消費者の価格容認はどのようにして成立していったのでしょうか？AW 畜産物市場成立に各ステークホルダーはどのように機能したのでしょうか？

②AW は日本でも難なく理解されると考えていいのでしょうか？家畜をはじめ動物にフレンドリーに触れ合う機会が他国に比較して極端に少なく、動物愛護は理解できても動物の立場に立つ AW を理解しにくい国民であるような気がしています。

③大規模な生産者が現行の具体的数値を示していない指針に沿ったとして”なんちゃって AW”畜産を実施し、比較的安価な AW 畜産物を多売した場合、高度な AW に取り組んでいる小さな農家はひとたまりもないと危惧しますが、やはり目指すべきは動物の立場に立ちつつ経済性（人の立場）も加味して実施すべきものであり、正直、動物に我慢してもらうべき部分はどこかは取り除かれないのは仕方がないということになるでしょうか？

Q７．後藤先生へ
① 新村さんが加藤らの研究として、日本におけるエンリッチドケージ卵価に対するエイビアリィ卵価が 1.33 倍、平飼い卵価が 1.73 倍を紹介しました。オランダのそれらに関する情報を教えて下さい。
EU での飼育方式別小売卵価（2022 年 11 月）をみると、エンリッチドケージ卵価に対するバーン卵価は 1.13 倍と報告されています。オランダでもその程度でしょうか。もしそうなら、日本のケージ代替システム卵価の高さの要因について、考えるところがあればお教え頂ければ幸いです。
② ケージフリーや断嘴禁止を進めるとつつきやカニバリズムの発生率が上昇し、生存率は低下するのではないでしょうか。これらを進めている EU の国でのデータ等があれば教えてください。

新村先生へ
アニマルウェルフェアが重要であることは理解できるのですが、現在、日本の畜産農家で家畜の生死に関わるプロセスまで深刻にとらえている方は稀だと思います。自らの経営を安定させるのに苦心している状態ですから。逆に結果から考えて、畜産農家にメリットがあるならアニマルウェルフェアを導入する余地があるかもしれません。たとえば、品質が向上するとか、疾病の発生率が減少するとか。一般論で考えて、飼育時のストレスが減るなら、病気になる率も減るような気もするのですが、いかがでしょうか？

Q８．3 講演とも大変勉強になりました。ありがとうございました。
Dr. Pannett 先生へ
グローバル戦略を支える 4 つの柱のなかで，科学的な AW 基準の開発として，研究および教育のための動物の利用の項目がありました。動物実験に対する基準や考え方について，大学でおこなう場合，また企業でおこなう場合，それぞれどのようになっていますでしょうか？
新村先生へ
EU，US などで想定されている 2025 年問題について，日本でも大手企業（流通，食品加工，外食店など）で同様の動きはあるのでしょうか？
後藤先生へ
三ツ星ラベルや KAT ラベルについて，ラベルの有無や星の数によって卵の価格は変わるのでしょうか？変わるのであればどのくらい値段が高くなって，消費者はどのようにその高価格を受け入れているのでしょうか？
新村先生へ
上記に関連して，日本でも J-GAP などの認証制度があるとのことでしたが，日本でも AW がさらに推進された場合に，消費者はどの程度値段が高くなっても買ってくれるものでしょうか？

Q９．新村先生へ
講義を受け、自分がアニマルウェルフェアと動物愛護を混同してしまっていることに気が付きました。アニマルウェルフェアは倫理的な側面だけではなく、衛生面の向上など持続可能な社会の構築のために様々な視点から取り組むべきゴールととらえなおしました。さて、アニマルウェルフェアは不可避の課題ということですが、飼料価格の高騰や担い手の不足など、既に様々な課題を抱える日本の畜産業において追加の枷とならないか、不安視しております。日本においてアニマルウェルフェアを推進するために、生産者・消費者に対してそれぞれどのようなサポートが必要とお考えでしょうか。

Q10．新村先生へ
日本においてアニマルウェルフェアの消費者意識が低いとのことだが、これに対する対策などは行っているのか。日本の消費者は自分たちの食べているものに関して総じて関心が薄いように思う。このような状態では家畜の飼い方にまで意識を向けることは難しいのではないか。

Q11. 後藤先生へ
ケージフリーにすることで挙げられていたいくつかの課題は、これまでの鶏の育種改良の方向性に反したものとなっているように感じるが、今後、大手育種会社はケージフリーに対応する鶏の育種改良へと舵を切るのか。また現在そのような鶏の改良を行っている実績等はあるのか。

Q12. 新村先生と後藤先生へ
貴重なご講演、ありがとうございました。
世界の情勢は理解できますが、日本の消費者は認識が低いだけでなく、特に衛生面を非常に求める食文化（卵の生食など）や常に低価格な食材を望むなど、価格転嫁が非常に難しい環境にあると思われます。また、農場が取り組むには前提としての価格転嫁が必要であり、さらに大きな設備投資を伴うなど非常にハードルが高いことが考えられます。そういった環境の中、日本においてアニマルウェルフェアを推進していくには、現実的には国の強い方針による法整備や補助事業、消費者への積極的な PR や販売サイドからの要請がない限り生産サイドでは取り組んでいくことは難しいのではないかと思います。
そこで質問ですが、今後、日本において具体的にどういった動きが予想され、生産サイドとしてはどういった情勢のタイミングに具体的に取り組んだらいいのか、また、日本ではどのレベルまでを求められるのか、先生のお考えをお教えいただけたらと思います。

Q13. 新村先生へ
① 西欧諸国において、エンリッチドケージも認めず、ケージフリーが最良とされるのはなぜでしょうか。（ケージフリーシステムも、鶏同士の競争、衛生面の問題、伝染病の蔓延等のデメリットがあり、これらは「飢え・渇きからの自由」や「痛み・疾病からの自由」を損なうものです。アニマルウェルフェアは、5 つの領域について相加的に考慮されるべきと思いますが、「正常行動発現の自由」へ強く焦点が当たっているように感じます。）
② 肉用種鶏では育成期間に給餌量を制限する管理が一般的と思われますが、制限給餌はアニマルウェルフェアでは問題とならないでしょうか。
③ 非ケージ化により生産コストの増大が予想されていますが、EU 等では各ステージ（生産、流通、消費、行政）で、どのようにコストが負担されているのでしょうか。

Q14. 後藤先生へ
①卵の生産のための品質管理システムは、ほぼ１００％の農家が参加しているとのことですが、日本でいう農場併設の直売所のような小さなところでも参加しているのでしょうか。
②KIPSTAR（キプスター）で雄ヒナは肉用にしているとのことですが、普通の卵用鶏種でしょうか。それとも卵肉兼用のような鶏種を使っているのでしょうか。
③オス雛淘汰規制の対応で卵内鑑別の研究が進んでいるようですが、卵肉兼用やオスも利用するという対応は広まらなかったのでしょうか。
④EU アニマルウェルフェアの動向で、従来ケージからエンリッチドケージへの移行が完了しているとのことですが、飼養システムの変化にともなって、農家戸数や飼養規模の分布に変化はあったでしょうか。
⑤アニマルウェルフェアの規制は、育種場や研究所、大学のようなところにも及んでいるのでしょうか。
⑥種鶏場や育種鶏（エリートストック）でのアニマルウェルフェアに対応した取組み事例はありますでしょうか。
⑦育種鶏での取組み事例がある場合、飼養方法や個体ごとの産卵や卵質などのデータ採取は、どのように実施されておりますでしょうか。

Q15. 新村毅先生、後藤直樹先生へ

①アニマルウェルフェアは日本では生産者にも消費者にもあまり知られていない。アニマルウェルフェア が日本における畜産物供給に必須であるならば、どのようにして現状を変えていくのか。

補助金の利用や価格保障などの行政的な手法が必要ではないか。アクションプランなどが必要ではないか。

②家畜の自発的行動欲求を満たすことへの対応には、施設や設備の改良が必要であり、生産量（供給量）の減少や生産効率の低下などを伴い、生産物単価が上昇するであろう。AW 生産が普及している、ヨーロッパやイギリスではコスト増を価格に転嫁して、消費者は対応できているのか。皆がフリーレンジ卵を買えているのか。

③AW の生産で国内需給を平衡させることを目指してはどうか。畜産物由来タンパク質の需要を国民の栄養摂取水準から算出し、これを満たす生産量に近づけるシステムはできるのか。

Q16. 新村 毅 先生へ

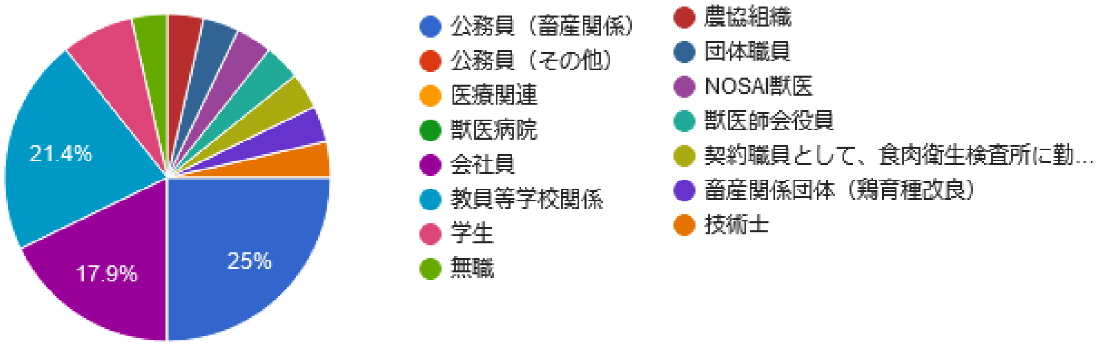
鶏が自分の急速な成長により、脚を痛めてしまうとありましたが、そのように品種改良された鶏のお肉は遺伝子的な危険性はないのでしょうか。

後藤 直樹 先生へ

卵内鑑別技術は日本でも研究されているのですか。また、低コスト、高コストとありましたが、具体的にどのぐらいのコストがかかりますか。

質問５．貴方のご職業をお聞きします。

28 件の回答



職業	回答人数	職業	回答人数
公務員（畜産関係）	7	会社員	5
公務員（その他）	0	教員等学校関係	6
医療関連	0	学生	2
獣医病院	0	その他	8

質問６．
シンポジウムへのご意見、ご感想、今後取り上げてほしいテーマなどがありましたらご記入ください。
（12 件の回答）

・サステナビリティに関係することとして、プラ削減、SO2 削減がありますが、断片的な切り口が多いように感じられ、資源の上流から下流、廃棄に至るまで、本当にそれを満たすためには、何が必要なのか、何が本当により正しいのか？　例えば自動車もハイブリッド車よりも電気自動車が本当に優れているのか？とか真実を考える機会を与えるシンポジウムを希望します。
・鳥インフルエンザ
・AW とスマート畜産
・日本と海外の情勢の比較が興味深かったです。
・牛におけるアニマルウェルフェアの現状と課題、ハンドリング改善などに関する講演も聴いてみたいです。
・高病原性鳥インフルエンザの多発要因
・高病原性鳥インフルエンザ
・抗生物質代替，代替肉，培養肉，昆虫食など
・先生方の貴重なご講演を自宅で受講できるような機会を設けていただきありがとうございます。お恥ずかしながら、シンポジウム等のテーマが業務内容（私であれば乳牛の臨床）から離れれば離れるほど、遠方に足を運んでまで受講する意欲が薄れてしまうのが現状です。その分、インターネット配信は基礎研究や将来的な世界の課題などについて学ぶ機会になりうるとも思っております。春には新型コロナウイルスの扱いも変更となりますが、今後も幅広い方式・内容でのシンポジウムの開催があればありがたく思います。
・興味深いシンポジウムでした。
・5 領域モデルを想定すると、5 つの自由は（満たすのが前提というくらいに）国際的な潮流では時代遅れとなっていくのでしょうか
・このようなシンポジウムを開いて下さり、ありがとうございます。今回のアニマルウェルフェアについての内容はとても参考になったのでぜひ、また機会があれば、アニマルウェルフェアについて取り上げて頂きたいです。